
3. 「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」(継続2年目)

—花と緑のまちづくりセンター設立の試み—

「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会
(茨城県つくば市)

1. 活動の目的と背景

助成を受けて二年目の「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会活動が始まりました。一年目の活動は、「花と緑が好き女性たちが、地域の公園の手入れを仕事として請け負ったらどうだろう。そうすれば、公園が地域の交流の場としてもっと生かされるし、公園もそれぞれ個性的になる。また公園で花や緑についての講座を開くことによって、周辺の住宅の庭を美しくすることもできる」というのが、コンセプトでした。

ところが、その活動を通じ、公園と市民の活動とが結びつくのには、まだまだ障壁があり、まずそこを変える必要があることに気がつきました。

つくば市の場合、112もある公園は、市、県、住宅・都市整備公団が管理しています。そのうち市の管轄下の公園が最も多いのですが、それを3人の公園係の職員が管理している現状では、業者に委託し、大過なく管理されるように指導する以上のことを求めるのは不可能です。しかし、このたくさんの公園と48キロにおよぶ歩行者専用道路を、市民が使いこなせる場にすることで、市民のあいだのコミュニケーションはずっと良くなるはずです。

そこで、「まち中の緑をつなぐ」ことが二年目の目標となりました。

「庭」に着目	「庭」は最も身近な緑の環境。つくば市の今はまだ豊かな緑をどんなふう大切にしていくか、「庭」に焦点を絞って考えてみる。
「庭」の公共性	集落の庭園、新しい住宅団地の庭、集合住宅の庭…どの庭にも公共性がある。外にあるのだから！ 緑道や公園は最も公共性のある市民の庭！
「庭」をつなぐ	いろいろな庭の持つ公共性を新しい形をつないでいく。集落の庭園での庭師講座。各家庭で苗を育て、公園に皆でデザインした花壇を etc. 「庭」をつなぐことは、「人」をつなぐこと。
「庭」で働く	緑の中で働きたい市民はいっぱい。ある時にはボランティアで、ある時には応分の報酬を得て、ある時にはプロとして。新しい働き方の実験。
「庭」の可能性	剪定枝を土壌改良や水質改良に使う炭にする。家庭の生ごみを集めて堆肥化。環境問題解決の糸口は「庭」にあり。

それができるためには、何が必要か。わたしたちは、それを「花と緑のまちづくりセンター」とでも名付けるべき、日本型NPOだと思いました。



「花のおがわ」の手入れ

II. 活動の内容

「花と緑のまちづくりセンター」の業務内容を想定し、その中でできそうなことから始めてみることにしました。

1. 公園内にコミュニティー・ガーデンをつくり、そこで市民の花壇づくりなどの指導をする。
2. 老人、身障者世帯の庭の管理。集落の大きすぎて手入れの届かない庭の手入れ。
3. 花と緑のネットワークの形成と運営。

1も2も、結局は3と同じく、花と緑を通して市民の間にコミュニティーを育てることにつながります。

まず、昨年つくった「花のおがわ」のわきにハーブガーデンをつくりました。ハーブの種類を決め、花壇のデザインをして苗を植え込み、キッチンハーブガーデン、コンテナガーデン三種など、充実のハーブガーデンができました。月桂樹を植樹したり、敷石を市松模様に剥がして、その下が砂地だったのでタイムなど乾燥を好む種類を植え込んだり、かなり大胆なことをしましたが、そこまできないと「庭」づくりは面白くありません。市の方でも、昨年度の実績があったので、「(何をやるにしても) 良識の範囲内でしょうからね」と黙認してくれました。

次に、ホワイトガーデンをつくらうという声があがりました。白い花ばかりを選び、秋に皆で種蒔きをしました。そして各自の庭やベランダで苗を育て、春、持ち寄って植え込んで、そして今、白い花が花盛りです。

また、「花のおがわ」のその後ですが、日当たりが悪いせい、春が来てよそでは花が咲きこぼれているのに、まだ咲かない、まだ草ばかり、と思っていたら、ある時一斉にジギタリスが咲き始めました。背の高いジギタリスは遠くからでもよく見えるため、これまでになく人々が寄ってきて、賛嘆の声しきり。一頃は、その一角だけ、異次元にまよいこんだかと思わせる雰囲気漂わせていました。新聞にも取り上げられたため、仲間にはいりたいという声もまた続々と届いています。

民家を借りての剪定講座



2については、今年は、剪定講座に使う庭を公募してみることにしました。それによって、どんな人が庭の手入れに困っているのか、どんな助けが必要なのかを見ることもできると思ったからです。

私たちの委員会が、剪定の勉強に使う庭を探しているという記事が出たとたん、堰を切ったようにはがきが届き、電話の問い合わせが相次ぎました。中には、ただで手入れをしてくれるのならもっけの幸い、というようなものもありましたが、たいていは、「老人家庭で庭の手入れに困惑していた」とか、「この機会に自分も学びたいので」など、私たちが想定した動機から応募してくれた方でした。締切の頃には、応募は450通にもおよび、反響があまりにも大きかったため、会の運営が不安定になった時期でもありました。このことを通じて、NPOのあり方についてつきつめて考えざるを得ず、結局はこれが今年の最大の収穫となったように思います。実際の講座は五回行ないました。

3については、「花と緑つうしん」を毎月発行し、庭見学会と講演会を二回（浅海義治さんの『NPOについて』と正木覚さんの『暮らしの中の植物』）行ないました。「花と緑つうしん」は、予算の関係もあり、内部での情報交換にとどまってしまうしましたが、講演会では、講師の方たちや他の市民団体とも交流が持て、有意義でした。



子どもたちもお母さんの指導で頼もしい働きぶり

III. 活動の成果と今後の課題

「庭」を公募したとき、その反響があまりにも大きかったので、会の内部に動揺が起きました。『無料で手入れする』ことに対し、本職の庭師さんたちからの反発があり、既に庭師さんのもとで働き始めていた一部のメンバーたちは、直接その反発を受けとめなくてはならなかったからです。

そのときに、はっきりわかったことは、「先駆的、創造的、継続的でしかも広がりのある」市民活動においては、全体をマネージする「核」の存在が不可欠であることです。もっとも、上記のような市民活動である＝「核」が存在している、ということなので、「核」の存在が意識される必要がある、と言い換えたほうがいいかもしれません。

私たちの場合に即して言うと、「庭」を公募するとき、「核」が広報し、その責任も全面的に負えば、動揺は起こらなかったのです。この「核」というのが、即ちNPOです。「核」のまわりにおいてこの活動に関わっている人たちは、いかに熱心でも、それぞれの立場からこの活動を見ているにすぎません。この活動全般を見通して、次に進むべき方向を見定め、まわりにも情報を発信しながら、一步一步進んでいく…この基本は「核」がやるべきで、そのことがまわりからも認識されていなくてはならない。そのためには、「核」は無報酬であってはならない。これは単純なようでいて、NPOの鉄則だと思います。この点がクリアされて初めて、学者や専門家の趣味、退職者や主婦の無料奉仕による市民活動からNPOへと脱皮することができるという確信を持ちました。

